

本号はボリュームが大きいので2通に分けて配信しています

INDEX

- 4 投稿 「良い実」のならない木 匿名希望
- 5 連載 モルモンのマインド・コントロールとは(第1回)北龍
- 6 ニュース

前半からの続き

投稿 「良い実」のならない木 匿名希望

モルモン教の存在を知ったのは、数年前のことでしたが、身近な人が改宗していたことを知ったことがきっかけでした。それ以来、モルモン教について色々調べ、主にインターネットの「反モルモン」と呼ばれる人たちを通して、色々な意見や情報を得ることが出来ました。モルモン教が、色々な問題を起こしている事実を知って、大変驚きました。

しかしここ一年ほどの間に、ネット上で展開されているモルモン教批判について、色々疑問に感じる事が多くなってきました。また、一部の脱会者、あるいはモルモン教を脱会して伝統的なキリスト教会のクリスチャンとなった人たちの言動にも、納得のいかないものを感じる事が有ります。

以前から、モルモン以外のキリスト教なら何の問題も無いとは言い切れないような、一部のクリスチャンの心無い言動に触れる機会があって、むしろ、「モルモンも他のキリスト教も、多くの似たような問題を抱えているという点で、実は大して変わらないのではないか」と思うようになってきたのです。

まず気になることは、モルモンを脱会し、伝統的なクリスチャンになった人が、別のキリスト教のことをあまりにも強く語りすぎる事、それも、「モルモンは偽物で、こちらこそが本物だった」と言った内容が多いことです。「何をどう信じるか、それは個人の自由だ」と言う人もいるかも知れませんが、

しかし、過去にモルモンだった反モルモンやクリスチャンの人の中には、モルモン教会の「他は全て悪魔の教会」や「他の教会は背教して、真理からは遠ざかっている」といった、他の教会を否定する独善的な教えに対し、批判的な意見を持つ人も多いのが実情のようです。

しかしそれならば、自分たちも「こっちこそが(こっちだけが)本物だ!」みたいなことを言うべきではないと思うのです。これは、モルモン教会が神が造った教会じゃなくて人間がでっち上げた教会だとか、モルモン教会は明らかにインチキだから批判してもいいとか、そういう問題ではないと思います。

私の持っている理屈は、極めてシンプルなものです。  
『自分がされて嫌なことは、他人にもしないようにしましょう』というだけの事です。モルモン教から伝統的キリスト教に移った人が、今自分の所属している教会や宗教を「インチキだ」などと批判されたら、当然良い気はしないでしょう。それならば、いかにモルモン教の教えや聖典などの内容がインチキに思えても、「他人の教会」をインチキ呼ばわりすべきではないでしょう。

例えばモルモン教信者が、実際に何らかの反社会的な問題を起こしたとか、また、教会内外で人を傷つけるような言動をしたとか、脱会届や個人情報を実際に処理しないなど、そういった「実害」の部分についての批判は、当然だとは思いますが、

また、モルモンから他宗教への逆勧誘になってしまうような発言も、慎むべきではないかと思える事が有ります。確かに、ある宗教に裏切られ傷付き、生きる指針を見失った人に、新しい別の指針を与えることは、必ずしも悪いことや好ましくない解決法だとは言えないでしょう。それが成功する場合もあるのだからと思えます。

しかし、現実には、逆のケースも沢山あります。むしろ「宗教に傷付いた人」の中には、「もう宗教なんて金輪際ごめんだ」という人も多いのです。そういう人たちに対して、「モルモン教はデタラメだったけど、正統派なら大丈夫。こちらは本物だ」などといったような発言をすることが、相手を不快にさせ、傷つけることになる可能性があることは、ほんの少しだけ「相手の気持ちになって」考えてみれば分かることではないかと思えます。たとえ「本物のキリスト教」への勧誘であろうと、無闇に改宗じみたことを勧めようとする人は、「他人の欲しているものを与えている」のではなく、「自分の望んでいることを実現している」だけに過ぎません。それでは、本質的にモルモンの勧誘行為とやっていることは何も変わらないと思うのです。

「本物か、偽物か」に拘りすぎる人の言動には、「傲慢」が見え隠れすることが多いと感じます。もちろん、純粋な意味で「本物を求める」気持ち自体は、分らないことありません。「今度こそ『本物』を得て、本当の安心、安らぎを得たい」という気持ちも、決して分らないではないのです。誰だって、辛い時、苦しい時、何かに頼りたくなったり、また心の支えになるようなものが欲しくなったりというようなことはあるでしょう。しかし、せつかく得た

の誇り」になってしまうケースが、どうも少なからずあるようです。なぜそこで「傲慢」に転じてしまうのか、それがすごく不思議に思えるところですが、これはモルモン脱会者に限らないようです。もっと別の理由でクリスチャンになった人たちにも、どうやら同じような問題は頻繁に起こっているようです。そういう意味でも、「モルモンだけが決して特殊ではない」と思えてしまいます。

その理由や原因が、果たして「本人」にあるのか、それとも「キリスト教」にあるのか、あるいはキリスト教に限定せずとも「宗教や信仰そのもの」にあるのか、あるいはまた、もっと別のところにあるのか、それはよく分かりませんが、結局のところ「良い実がなっていない」のだと言うことではないでしょうか。そういう意味では、たとえばモルモン教会が日頃から「自ら良い行いで模範を示す」ことに拘るのも、決して分からないではありません。

もっともモルモンの場合は、改宗者を増やすことを目的に「良い人を演じよう」とする、あまり感心出来ない意図を持っている人いるわけですが、しかし、この「良い実」がなるかならないかで評価されてしまうということ自体は、決してモルモン教だけの問題ではありません。モルモンであろうとなかろうと、「良い実」がなければ、一般社会からは信用されないし、評価もされない、それは仕方のないことではないのでしょうか。

また、伝統的クリスチャンの側からの言い分としてよく耳にするのが、「モルモンと違って本物のキリスト教は、他宗教の批判などしない」という主張にも疑問があります。もちろん、これを全くの嘘などとは思いませんが、かと言って、クリスチャンが全てそういう「善良な人」ばかりというわけではありません。他宗教を批判するクリスチャンは、現実には少なからず実在します。特にネットのような「顔の見えない」場所では、思わぬ「本音」が頻繁に飛び出してくる。そういったサイトや掲示板は、インターネット上で簡単に見つけることができます。

また、いわゆる「正統派」の主張する「信仰義認」についても色々疑問はあります。確かにモルモンの意図する「行為義認」のような考え方は、決して私も賛同出来ません。「改宗者を増やすために、あるいは自分が救われるために良い行いをしよう（しなくては）」などというのは、単なる打算に過ぎません。しかし、だからと言って「行為義認」ではなくて「信仰義認」なら良い、ということになるのでしょうか。伝統的教会の主張する「信仰義認」に基づく考え方によれば、「自分の罪が赦され、救われたことによる喜びから、打算ではなく自発的に、自然と良い行いをしようになる。行いではなく信仰によって救われるのだ」ということらしいですが、しかしそれとて、結果的に本当に良い行いを実際に行って、それで初めて意味のある教えになるのではないのでしょうか。いくら口だけで「愛」だの「救われた」のと言っていても、実際の行いが、自分たちの批判しているモルモンと大して変わらない、場合によってはモルモン以下に過ぎないのなら、「信仰義認」にどれだけの意味があるのか、到底理解出来ないところでは。それでは所詮「机上の空論」に過ぎないのではないのでしょうか。「信仰義認」であろうと「行為義認」であろうと、結局は「現実の行いが良くなければ意味がない」、つまりは「良い実」かどうかの問題になってくるのではないのでしょうか。

そういったことも、モルモン教批判に対する疑問の一つの理由です。確かに、伝統的キリスト教の教えでは、あくまで「信仰義認」であって、「行為義認」ではないようです。しかし「信仰義認ではなく行為義認だから、モルモンは間違っている」という批判の論理は、あまりに物事を一面的にしか見ていない発想のように思えてなりません。

「良い実」のならない例は、他にも思いがけないところで見つけることがあります。一つ、私の体験したことをお話したいと思います。

私は以前、とあるプロテスタント集団が主催する、あるボランティアに参加したことがあります。活動の内容や意図自体は、ある社会問題に正面から向き合った、非常に意義のあるものだとは思いましたが、しかし正直に言って、そこにはもう二度と参加したくないと思いました。

まず、それまで無関心だった一般人の中から、その「ある社会問題」に関心を持ち、微力ながらも力になりたいたいと集まってくれた人がせっかく大勢いるのに、そのことに対しての「感謝の気持ち」が全く無いのです。これには大変驚きました。それどころか、「本当はもう人数は十分足りてるから、こんなに来てもらってもね」とか、「何も経験の無い素人の人に来られても、正直足手まといで迷惑なんだよね」とか、そういった心無い、信じられないような言葉が「主催者のほとんどから出た」ことです。

また、ボランティアの期間中、その「ある社会問題」についての講義の時間のようなものもありましたが、これも内容的には何とも酷いもので、話者も、まるで「お前たちは何も知らない素人だ。俺様たちがこの問題について教えてやろう」と言わんばかりの傲慢な態度を全く隠そうとしないのです。実際「あんたたちは何も分かっていないんだから」という言葉を頻繁に使っていました。経験の長い人が色々知っているのは当たり前前の事です。そんなつまらないことを誇るのではなく、経験や知識は分かち合えば良いではありませんか。

私は「この人たちは、一体何がしたいんだろう？」と、何とも不思議に思いました。ああいったボランティアや慈善活動のようなものには、「協力者」が不可欠です。一人では、自分たちだけでは、何も出来ないのです。なのに、味方を、理解者を増やさなくて、一体どうするのでしょうか？それどころか、むしろ敵をドンドン増やしている印象です。主催者側がそのような傲慢な態度でしたから、当然のことながら、憤慨している参加者が続出していました。いくら「社会問題を扱ったボランティアをしていったって、これでは全く台無しです。せっかくの「善行」も、なんら説得力を持たなくなってしまいます。その社会

か。「良い実」がならなければ、別にモルモンでなくとも、世間からの理解を得ることは出来ません。モルモンが何か問題を起せば、「ほら、やっぱりモルモンはこれだから」という目で見られることも多いようですが、決して他人事ではないのではないのでしょうか。

それは、求道者についても同じことです。たとえば、ネット上でも頻りに話題になる、宣教師と求道者（女性）との関係の問題についてもそうです。

ある有名なサイトにあるような「宣教師レイプ事件」のような話なら、明らかに宣教師にも非はあるのでしょうし、また、そういった事件があった、その事実自体を決して疑うつもりはありません。しかし、そういう極端な事例の場合とはかく、最近のモルモン教会とその周辺を注意深く見ていると、求道者や英会話教室の生徒の中に、いわゆる「宣教師に色目を使う」女性を、実際に沢山見かけるのです。そういった話も以前からインターネット上でも噂程度には出ていたようですが、実際に噂で言われている以上に、求道者の方から「不純な動機で宣教師に近づく」ケースが、本当に驚くほど多いです。当然そういう人は、英会話目的でも、信仰目的でもありません。はっきり言ってしまえば、「カッコイイ、金髪の若い男の子」目当ての不純な目的に他なりません。こういった求道者には、教会側も対応に苦慮していることも多いようです。

結局のところ、「良い実」がならなくて批判を受けるのは、別にモルモンだけの問題ではないということです。モルモン教だろうとキリスト教だろうと、求道者だろうと反モルモンだろうと、「良い実」がならず、疑惑や批判を受けるような問題行動があるのなら、一般社会から理解や共感が得られないのは同じことです。モルモン教会だけではなく、それぞれの立場にいる人、また「個人」も、「自分の問題」として考え直すべきことではないのでしょうか。

## 連載 モルモンのマインド・コントロールとは（第1回） 北龍

私は、昨年（2005年）の12月3日にモルモン教会の脱会届を提出しました。気持ち的に一区切りついたつもりでしたが、家族の中で一人だけモルモンを辞めた私は、死後家族とバラバラにされる、私は滅びの子になると言う不安が付きまといました。所謂フラッシュバックですね。

私は、モルモン教会を辞めた後、いろんなプロテスタント教会を巡りましたが、ある教会で、マインドコントロール研究家のズヴィ・パスカル氏と会う機会があったのです。私は、パスカル氏と連絡を取り合うようになりました。そして、私がモルモンのフラッシュバックに悩まされている事を打ち明けるとパスカル氏の「マインドコントロール研究所」に出向いてカウンセリングをしようと言う事になりました。

以下にパスカル氏の許可の下、氏との対談で学んだ事を書き記して行きたいと思えます。一回の投稿では書ききれないと思うので、何回かにわけて連載したいと思っています。

パスカル氏は統一協会を主な研究対象にしておられる方です。モルモンのことは統一協会ほどは詳しくないようです。しかし、私の話を聞けば聞くほど、モルモンにも統一協会のようなマインド・コントロールのテクニックが使われていると驚いておられました。

まず、マインドコントロールとはなにかと言うことについて触れておきたいと思えます。パスカル氏の「マインドコントロール研究所」編の「親は何を知るべきか」を参考文献にさせていただきます。

・カルトの特徴として、名前を偽るか本当の目的を隠して勧誘します。

これは、統一協会では色々な関連団体の名前を使って巧妙に統一協会の中に引っ張り込んで行きますが、モルモンでは、名前を偽る事はないものの、モルモンへの勧誘と言う本当の目的を隠して人々を引っ張り込もうとします。その典型的な例が「無料英会話」です。無料で英語を教える奉仕活動と言う美名の裏に隠れているのは、モルモン教の教会員にしようと言う勧誘の下心です。

・カルト信者の精神構造

カルト信者はカルト宗教団体にマインド・コントロールされて行けばいくほど、本来の自分を押し殺していくのです。

カルトの自分 > 本来の自分

本来の私はモルモン教など望んでいなかったのです。マインド・コントロールのテクニックを施されていくうちに、本来の自分は脳の奥に追いやられカルトの自分が表面に出てくるので、「モルモン教会は真実だ。」と思い込まれるのです。今思えば活発モルモン時代の私がまさにそうでした。戒め・規則だらけのモルモン教義に疑問を持ちながらも「カルトの自分」が脳内で優位に立っていたものですから、無理矢理に「この教会は真実だ。」と思い込もうとしました。

かつて、私は「オムナイチルドレン」の一人だった事は以前にも書きましたが、ああいうふうにもモルモン教徒同士でモルモン教擁護のおバカな書き込みをしあう事によって「カルトの自分」に支配されている自分をごまかそうとしていたのです。オムナイ氏の書き込みを見ているとまさにそういう状態に今ある

事に酔っているのです。

マインドコントロールから醒めたばかりの人は自分を責めるものです。パスカル先生はカウンセリングを始めるに当たって「自分を責めちゃいけませんよ」と言われました。悪いのは今まで自分をだまし続けてきたモルモン教会であって、自分は悪くないと思いなさいということです。みなさんも、モルモン教から抜け出たばかりの人と接する時は、決してその人を責めるような事はしないでください。彼らはカルトの自分と本来の自分と戦っている最中なのですから。

「あなたは悪くない、ゆっくり静養してくださいね。」  
と優しく声をかけてあげてください。  
次回は破壊的カルトのマインドコントロールのテクニックについて書きたいと思います。

## ニュース

映画「Latter Days」  
既にBBSなどで紹介済みですが、国際レズビアン&ゲイ映画祭で映画「ラターデイズ」が上演されます。詳細はこちらでもチェックして下さい。

<http://garyoan.exblog.jp/4009192/>  
本作は、今まで国内では上映されたことがありません。日本語字幕を日本人元モルモンが監修されました。上演が決定して直ぐ、アメリカ在住の元モルモンから問い合わせが来るなど、かなりの反響を呼んでいます。

映画祭での上演決定には作品の優秀さが決め手になったものですが、作品の権利を持っている海外の配給会社との話し合いはスムーズであったとのことです。機会のあるかたはごらんになられてはどうでしょうか。

会の公式サイトに会報バックナンバーのページが出来ました。  
<http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/kaihobn.html>  
勇気と真実の会は会員募集中です。  
詳しくは当会へお問い合わせください。  
投稿記事募集  
脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文はブレンテキストで作成ください。

\*\*\*\*\*

メールマガジンの購読申し込みはこちら  
[http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe\\_mailmag.htm](http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmag.htm)

メールマガジンバックナンバーはこちら  
<http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/kaihobn.html>

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス [jemnet@infoseek.jp](mailto:jemnet@infoseek.jp)

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.  
無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。  
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。